Who are the Sherpas? : Process and Background of ;Sherpaization;

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/920

金沢大学文学部論集　行動科学・哲学篇
第19号　1999年　61～82

シェルパとは誰のことか
―「シェルパ化」とその背景―

鹿　野　勝　彦

Who are the Sherpas? —Process and Background of "Sherpaization"

Katsuhiko KANO

1　はじめに
2　ネパールにおける「シェルパ化」
　1）センサスにおける「シェルパ化」
　2）民族誌におけるシェルパとセンサス
　3）「シェルパ化」の要因と背景
3　ダージリンにおける「シェルパ化」
4　おわりに

1　はじめに

ネパールの1991年のセンサスにおいては、それまでの母語別の人口に加え、初めてカースト・民族集団（caste/ethnic group　すなわちジャート jat）[1] 別の人口が集計され、両者のクロス集計も示された。このセンサスの結果によれば、シェルパ（Sherpa）の人口は約11万人であり、またシェルパ語ないしボテ語（Sherpa/Bhote）すなわちチベット語ないしその方言を母語とする人口は約12.2万人であった。しかし後述するように、この結果のうち、シェルパの人口、およびその地方的な分布は、従来の民族誌の常識からは、かなりかけはなれている。

本稿では、このセンサスの結果を、従来の民族誌とあわせて考察することにより、近年のネパールにおける「シェルパ化」ともいうべき現象の背景を探るとともに、20世紀初頭以降の、インド、ダージリン地区における同様の現象にも注目して、比較を試みる。

いうまでもなくセンサスにおける集団の分類は、意識的にせよ、無意識にせよ、それを実施する国家・政府の統治目的に基づいて、多少とも恣意的になされるが、一方、個々の集団の側も、一定の限界の中でにせよ、主体としての意志をもってその分類に対応し、自

らの位置づけを選択しようとする。センサスの結果は、こういった相互の関係を反映していると考えられる。このようなセンサスの結果の形成過程そのものが、充分に検討に値する課題であるが、[2] 本稿の直接の目的は、センサスの本質を考えること自体ではなく、シェルパという特定の民族集団と、その民族の名称をめぐる状況を検討することに限定される。

2　ネパールにおける「シェルパ化」

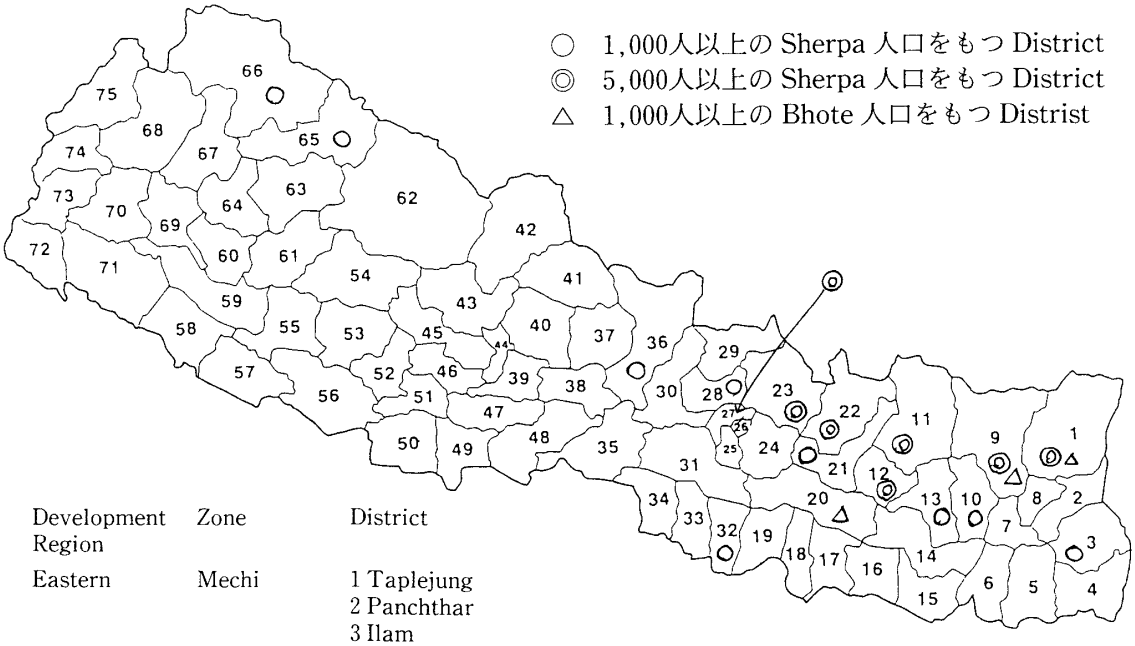
1）センサスにおける「シェルパ化」

まずネパールの1991年のセンサスにおけるシェルパの人口、およびシェルパ語・ボテ語を母語とする人口と、その地域的分布を確認することからはじめたい。

1991年のセンサスにおいては、全部で65のカースト・民族集団のカテゴリーが用意されている（外国人、不明を含む）が、「その他」（others）というカテゴリーがタライ、丘陵部（hill）、山岳部（mountain）と3つ含まれているように、おおまかには地理的な区分とカースト・民族集団の分類とが対応するものと想定されている。そしてタライ、丘陵部については、それぞれ30のカテゴリーが用意されているのに対し、山岳部においてはシェルパ、ボテ[3] 及び「その他」の3つのカテゴリーしか用意されていない。この山岳部のカテゴリーは、全体としては、おおむね本来チベット語ないしその方言を母語とし、チベット仏教徒であるような民族集団を想定していると考えられる。

また1991年のセンサスにおける母語としての言語のカテゴリーは、「不明」を含め、35であるが、そのうち山岳部の民族集団の本来の母語に相当する言語としては、シェルパ語1つのみがあげられている。母語別の人口統計は1952—54年のセンサス以来あって、そこであげられている言語数は17から36と一定していないが、チベット語系の言語の分類自体は、1981年以前のセンサスではシェルパ・ボテ語（Sherpa/Bhote）と表記されているものの、やはり1つだけであって、基本的には変化していない（KUMAR：1995，301）。この言語のカテゴリーは、要するにシェルパ語を始めとするチベット系の諸言語、その方言などの総体としておいてよいであろう。表—1は1991年のセンサスにおけるシェルパ、ボテ及び「その他」の山岳部民族集団の人口、ならびにシェルパ語を母語とする者の人口を、県（zone）、郡（district）ごとに（ただし郡については、郡でいずれかの数値が1,000人を越えた場合のみ）まとめたもので、比較のため、1981年のセンサスにおけるシェルパ・ボテ語の母語人口を併記した。また図—1は、ネパールにおける県、郡の区分けを示している。

表—1に示されるように、山岳部民族集団の総人口は約12.5万人で、これはネパールの総人口の0.67%にすぎないが、そのうちシェルパとして集計された者の人口は約11万人、その88.6%と圧倒的多数を占める。これに対してボテとして集計された人口は1.2万人強、その10.0%にすぎず、「その他」は2,000人にも達しない。このシェルパのうち、約5.7万人、すなわち約52%は、東部開発区（Eastern Development Region）の主に山岳、丘陵部に、



Development Region	Zone	District
Eastern	Mechi	1 Taplejung 2 Panchthar 3 Ilam 4.Jhapa
	Koshi	5.Morang 6.Sunsari 7.Dhankuta 8.Terhathum 9.Sankhuwasabha 10.Bhojpur
	Sagarmatha	11 Solukhumbu 12.Okhaldhunga 13.Khotang 14 Udayapur 15.Saptari 16.Siraha
Central	Janakpur	17.Dhanusa 18.Mahottari 19.Sarlahi 20.Sindhuli 21 Ramechhap 22 Dolakha
	Bagmati	23.Sindhupalchok 24.Kaverpalanchok 25.Lalitpur 26.Bhaktapur 27.Kathmandu 28.Nuwakot 29.Rasuwa 30 Dhading
	Narayani	31.Makwanpur 32.Rautahat 33.Bara 34.Parsa 35 Chitawan
Western	Gandaki	36 Gorkha 37 Lamjung 38.Tanahu 39.Syangja 40.Kaski 41.Manang 42 Mustang 43 Myagdi 44 Parbat 45.Baglung
Mid-Western	Dhawalagiri	46.Gulmi 47.Palpa 48.Nawalparasi 49.Rupandehi 50.Kapilbastu 51.Arghakhanchi
	Lumbini	52.Pyuthan 53.Rolpa 54.Rukum 55.Salyan 56.Dang
	Rapti	57.Banke 58.Bardiya 59.Surkhet 60.Dailekh 61.Jajarkot
	Bheri	62.Dolpa 63.Jumla 64 Kalikot 65.Mugu 66 Humla
Far-Western	Karnali	67.Bajura 68.Bajhang 69.Achmam 70.Doti 71 Kailali
	Seti	72.Kanchanpur 73.Dadeldhura 74.Baitadi 75.Darchula
	Mahakali	

図—1　ネパールの行政区分

表一1　1991年センサスにおける「山地民族」と1981、1991年センサスにおける「シェルパ語・ボテ語」母語人口の分布

Zone / District	Ethnic Group (Mountain) (1991)			Mother Tongue Sherpa / Bhote	
	Sherpa	Bhote	Other(Mt.)	(1991)	(1981)
Mechi	〈15,482〉	〈1,233〉	〈198〉	〈14,742〉	〈10,002〉
Taplejung	10,254	1,057	19	10,696	7,314
Ilam	3,794	60	127	2,820	1,942
Koshi	〈12,165〉	〈4,636〉	〈649〉	〈15,156〉	〈8,882〉
Sankhuwasabha	6,737	4,273	399	10,803	5,915
Bhojpur	2,985	34	7	2,238	1,021
Sagarmatha	〈29,760〉	〈383〉	〈152〉	〈27,854〉	〈20,078〉
Solu Khumbu	20,241	27	15	19,328	15,166
Okhaldhunga	7,387	170	2	6,658	3,021
Khotang	1,606	111	70	1,198	311
Janakpur	〈14,472〉	〈3,079〉	〈61〉	〈15,576〉	〈9,575〉
Sindhuli	332	2,841	2	2,280	391
Ramechhap	4,393	107	9	4,070	1,876
Dolakha	9,515	52	27	8,040	6,099
Bagmati	〈22,998〉	〈1,431〉	〈380〉	〈21,393〉	〈8,635〉
Sindhupalchok	11,072	518	158	12,321	5,524
Lalitpur	733	45	7	1,222	115
Kathmandu	9,263	631	188	6,063	1,664
Nuwakot	1,208	28	0	1,164	800
Narayani	〈2,249〉	〈95〉	〈54〉	〈1,744〉	〈1,188〉
Rautahat	1,241	9	14	1,164	427
Gandaki	〈6,439〉	〈278〉	〈65〉	〈5,341〉	〈2,511〉
Gorkha	4,422	43	1	4,626	1,745
Dhawalagiri	〈476〉	〈76〉	〈10〉	〈5,517〉	〈3,136〉
Mustang	165	4	2	5,450	2,919
Lumbini	〈460〉	〈189〉	〈30〉	〈222〉	〈631〉
Rapti	〈128〉	〈163〉	〈8〉	〈62〉	〈402〉
Bheri	〈289〉	〈129〉	〈38〉	〈268〉	〈386〉
Karnali	〈4,606〉	〈304〉	〈40〉	〈13,171〉	〈7,291〉
Dolpa	225	3	0	6,393	2,229
Mugu	1,200	256	5	3,919	1,860
Humla	2,904	11	4	2,704	2,947
Seti	〈471〉	〈358〉	〈47〉	〈646〉	〈524〉
Mahakali	〈313〉	〈97〉	〈8〉	〈127〉	〈349〉
Total	〈110,358〉	〈12,436〉	〈1,741〉	〈121,819〉	〈73,589〉

資料出所　HIS MAJESTIES GOVERNMENT OF NEPAL : 1984, 1993

また約4万人、約36%は中部開発区(Central D.R.)の山岳、丘陵部に居住しており、その合計はシェルパ人口の約88%を占める。1つの郡で1万人以上のシェルパ人口を擁する郡はSolu-Khumbu, Sindhupalchok, Taplejungの3郡のみであるが、Dolakha, Okhaldhunga, Sankhuwasabha, Ramechhapなどの各郡にも、ある程度まとまったシェルパ人口が見られ、首都圏(Kathmandu, Lalitpur, Bhaktapur)にも合計1万人以上のシェルパが居住している。西部開発区(Western D.R.)以西ではGorkha, Humlaなどの郡に一定のシェルパ人口がみられる。

一方、ボテについては、1つの郡に1,000人以上の人口が見られるのは、Sankhuwasabha, Sindhuli, Taplejungの3郡のみで、そのうちSindhuliを除けば、ボテの人口はシェルパよりかなり少ない。首都圏におけるボテの人口も全体で700人をやや上回る程度にすぎない。ネパール全体においては、ボテの人口がシェルパを上回るか、ほぼ同数である郡は、Sindhuli以外に8郡あるが、そこでのそれぞれの人口は数十人程度にすぎない。「その他」の山岳部の民族集団については、先にも述べたように、統計的にはほとんど問題にならない。

要するに1991年のセンサスにおいては、山岳部の民族集団、すなわちチベット系の民族集団の圧倒的多数は、シェルパとして自らを登録し、そう集計されたことになる。

ついでシェルパ・ボテ語を母語とする者、およびシェルパ、ボテに属する人々の言語状況についてみてゆく。表—2は1991年のセンサスから山岳部の諸民族集団を主要な母語別にまとめたもの、また表—3は同じくシェルパ語を母語とする人口を、民族集団別にまとめたものである。なお表—4は1952—54年以降のセンサスにおけるシェルパ・ボテ語を母語とする者の人口の変化を示している。[4)]

まず表—1からはネパール北部の山岳部には、いずれの郡にもある程度まとまったシェルパ・ボテ語を母語とする人口が見られ、その分布は民族集団としてのシェルパやボテの分布とおおむね重なっている。言い換えればここでの民族と母語の一致する比率はかなり高い。またそれとともに、これらの民族集団の中にはネパールの国語であるネパール語を母語とする者の比率も比較的高く、特に首都圏では高率を示すようである。[5)] その一方で山岳

表—2　1991年センサスにおける「山地民族」の母語

Ethnic Group (Mountain)	Mother Tongue (%)				
	Sherpa	Nepali	Tamang	Others	Total
Sherpa	80.0	12.9	2.3	4.8	100
Bhote	65.7	18.3	12.0	4.0	100
Others	5.2	61.3	7.4	26.1	100
Total	77.6	14.1	3.3	5.0	100

資料出所　HIS MAJESTIES GOVERNMENT OF NEPAL : 1993

表—3　1991年センサスにおけるシェルパ語母語者

Ethnic Group	Population	%
Sherpa	88,309	72.5
Bhote	8,182	6.7
Others(Mountain)	91	0.1
Gurung	10,835	8.9
Tamang	6,342	5.2
Occupational Castes(Hill)	3,252	2.7
Magar	1,282	1.1
Others (Hill)	3,526	2.9
Total	121,819	100

資料出所　HIS MAJESTIES GOVERNMENT OF NEPAL : 1993

表—4　シェルパ、ボテ諸語母語人口の変化

Census Year	Population (Nepal)	Mother Tongue	
		Sherpa/Bhote	%
1952-54	8,235,079	70,132	0.85
1961	9,412,996	84,229	0.89
1971	11,555,983	79,218	0.69
1981	15,022,839	73,589	0.49
1991	18,491,097	121,819	0.66

資料出所　KUMAR : 1995, 302

部の諸民族集団の成員以外にも、シェルパ・ボテ語を母語とする人口がある程度いることがわかる。これらの人口のうち、丘陵部の職業カーストは、シェルパ等の村に少人数が分散して居住していると考えられるが、それ以外のグルン、タマン、マガール等の場合は、むしろ表—1に示されるように、シェルパ、ボテ人口があまり見られない特定の地域(例えばDhawalagiri県Mustang郡、Karnali県Dolpa郡、Mugu郡など)に集中している。すなわちそこでは民族としてはグルン等に集計された人々のうちのかなりの部分が、シェルパ・ボテ語を母語としている。[6)]

だが、このようなセンサスにみる結果は、始めに述べたように、従来のネパールの山岳部における民族誌の基本的な認識とは、かなりかけ離れている。そこで次節では、ヒマラヤ高地の諸民族集団、とりわけシェルパについての主要な民族誌の整理を行い、それらと

センサスの異同を検討する。

2）民族誌におけるシェルパとセンサス

1991年センサスにおけるカースト・民族集団の分類は、大きくはタライ、丘陵、山岳という地理的な区分によっているが、この区分は、センサスばかりでなく、元来は行政上の区分でもあり、かつ、民族誌的な記述にも利用されていた。例えばBISTAによるネパールの包括的な民族誌においては、その住民は丘陵・河谷、タライ、ヒマラヤに分けて記述されている。ここでヒマラヤの住民とは、おおよそネパール北部の高地に住み、チベット語ないしその方言と言うべき言語を母語とし、チベット仏教徒であるような人々を指す（BISTA：1972，他にGELLNER他ed.：1997，石井編：1985なども参照）。

しかしこれらの民族誌においては、この高地のチベット系の住民は、民族集団としては、センサスに比べると、はるかにきめ細かく区分されてきた。例えばBISTAはヒマラヤの住民として、シェルパを筆頭に、それぞれに異なる地理的分布、呼称、文化的独自性等をもつ9つの集団について記述しており、その集団の区分と地理的な分布は以下の通りである。

Sherpa—Solu Khumbuを主に東部高地

Lhomi—Sankhwasabha

Thudam，Topkegolaの住民—Taplejung

Olangchungの住民—Taplejung

Lopa—Mustang

Baragaunle—Mustang

Dolpoの住民—Dolpa

Manangba—Manang

Larke，Siarの住民—Gorkha

各項においてBISTAはさらに各集団内部の細かな区分にも言及しているが、上の記述自体も実は必ずしも網羅的なものではなく、例えばMuguやHumulaの住民についての記載は欠けている。

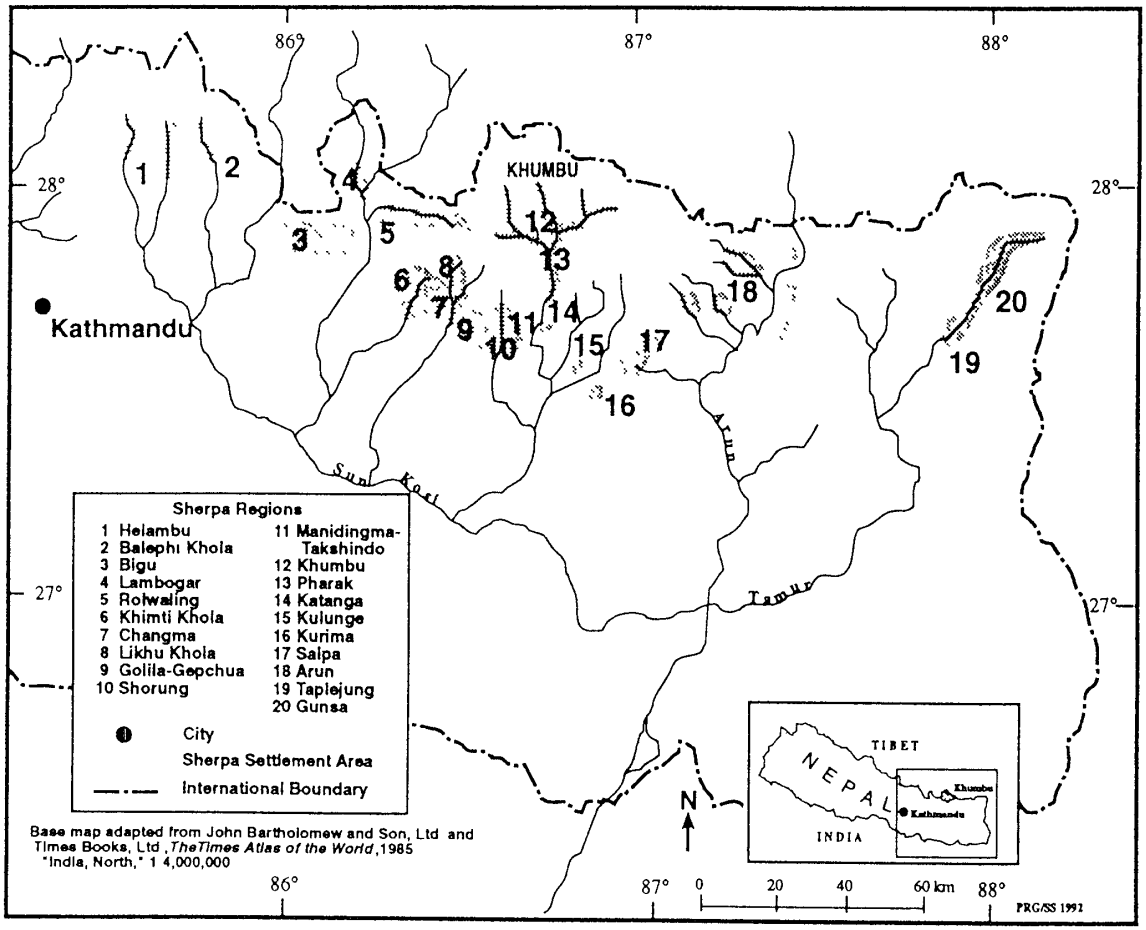
FÜRER-HAIMENDORFは、ヒマラヤ高地に住みヒマラヤ越えの交易に従事するチベット系の民族集団として、BISTAのあげたいくつかの集団に加え、MuguとHumulaのボーテイアをあげている（FÜRER-HAIMENDORF：1975）。またRAMBLEはヒマラヤ高地のチベット系住民としておよそ15の異なる集団が存在するとする（RAMBLE：1997，394）。細部の異同は別として、このような認識はネパールのヒマラヤ高地の民族誌においては、一般的であるといえよう（JEST：1978，鹿野：1986なども参照）。シェルパは、これら多くの民族集団のなかで、もっとも有力ではあるが、主に東部の高地に分布する1つの民族集団であるにすぎない。

それではシェルパについては、従来の民族誌はどのように見てきたのだろうか。現地調査をふまえたシェルパに関する先駆的な民族誌において、FÜRER-HAIMENDORF は、シェルパが集中的に居住する地域として、Solu-Khumbu のほか Ramechhap, Dolakha, Sindhupalchok などをあげており、Taplejung や Sankhuwasabha などについては、シェルパも若干は分布するものの、むしろそれ以外のボーテイア、すなわちチベット系の民族集団が主に居住する地域とみなしている。また Ilam, Bhojupur, Khotang, Okhaldhunga などにも多少のシェルパが分布するほか、インドのダージリンにもかなりのシェルパが居住することも言及されているが、カトマンズ以西には、ポカラ (Pokhara) をのぞけば、シェルパはほとんど居住していないとされる (FÜRER-HAIMENDORF：1964, 3-4および284-285間の地図)。ただネパールにおけるシェルパの総人口については、言及はない。

1965年に Solu-Khumbu で詳細な現地調査を行った OPPITZ は、16世紀におけるシェルパのチベット東部からネパール東北部への移住の歴史と、これを反映するシェルパのクラン構造をあきらかにするとともに、シェルパの Solu-Khumbu 地方の人口を約15,000人(チベットからの比較的近年の移住者であるいわゆるカムバ Khamba を含む) と算定した (OPITZ：1968, 101-109, 143-146)。OPPITZ は、ネパールにおける Solu-Khumbu 以外でのシェルパの地理的分布には言及していないが、シェルパを基本的にはネパール東北部高地の住民とする点においては FÜRER-HAIMENDORF と共通している。この点についての認識は、BISTA や、1990年代はじめに現地調査をおこなった STEVENS もまた同様である(BISTA：1972, 160, STEVENS：1993, 35-39)。ここに STEVENS によるシェルパの分布域を示す地図をかかげておく (図—2)。

ただこれらの民族誌においても、シェルパという民族集団の定義に、常に一定のあいまいさがつきまとうことに、注意しておく必要があろう。すなわちシェルパの村の住民には、しばしば「真の」シェルパの他に、「疑似」シェルパやカムバと称される人々が含まれており、これらの人々の間には通婚関係もあって、その間にはある程度流動性があるように見える(FÜRER-HAIMENDORF：1964, 27, OPPITZ：1968, 101)。このあいまいさをとらえて ORTNER は、「シェルパとは誰のことか」という疑問を投げかけ、その定義が時代によっても、また記述者によっても、さらに対象とした地域によっても微妙に異なるとするが (ORTNER：1989, 4-6)、この点については後にまたふれることとしたい。

いずれにせよこれらの民族誌から導かれる結論は、シェルパはネパールでは、Solu-Khumbu を主としてその西方の Ramechhap, Dolakha の各郡にまとまって分布するほか、東部ネパールからカトマンズ北方まで分散して居住しているが、それより西方にはほとんど居住していない、というものである。シェルパに関する現地調査を踏まえた民族誌的報告は、1990年代のものも含め、少なくないが、それらにおいても一般に上の認識は踏襲されているし、筆者自身の1970年代以降のシェルパを対象とした現地調査を振り返って



図―2　シェルパの分布域（STEVENS：1993, 367）

も、1970年代後半からのカトマンズへの移住を別とすれば、上の認識はおおむね妥当であるとおもわれる。[7)]

すなわち民族誌の常識からすれば、1991年のセンサスの時点においても、ネパールの西部開発区から極西部開発区(Far Western D. R.)にかけて、シェルパがまとまって居住している地域があるとは考えにくく、その高地には他のさまざまな名称と文化的独自性をもつチベット系の民族集団が存在するはずである。またネパール極東部、Tamur 川、Arun 川上流部の高地においても、事情はほぼ同様である。これらのチベット系民族集団の名称については、民族誌によってそれぞれ微妙に異なっている場合があるが、いずれにしても各集団はシェルパとははっきり異なる集団と考えられてきた。

ここでセンサスにおけるもう1つの山岳部の民族集団のカテゴリーであるボテ（ないしボーティア Bhotia）について、民族誌の側からの確認をしておく。ボート（Bhot）とはもともとネパール語などパハリー諸語でチベットを意味し、ボテはパハリー語を母語とするヒンドゥー教徒がチベット系とみなした人々を指すのに用いる呼称であって、ネパールでは、19世紀にはゴルカ王朝の法制においてチベット系とみなした集団に対する分類名称で

もあったが、どの集団においても自称ではない。パハリー系のヒンドゥー教徒がボテという場合、多少とも蔑称的なニュアンスが含まれるとされるが、いずれにせよボテという呼称は、ヒマラヤではシッキム、ネパールからインド、ウッタル・プラデーシュ州北部まで、広い範囲で、様々な民族集団に対して用いられてきた。後述するようにシェルパもまた、ボテに属する1つの集団としてあつかわれてきたが、ネパールのボテの一部はグルンを自称していたし（BISTA のあげたグループのうち Baragaunle, Manangba など。BISTA：1972)、一般にネパール中西部 (Mid Western D.R.) 以東のボテと呼ばれる集団が、言語、宗教などの面からチベット系とみなされてきたのに対し、ネパール極西部より西でボテと呼ばれてきた集団の多くは、チベット・ビルマ語系とはいっても、チベット語の方言とはいえない独自の言語を母語とし、宗教的にはヒンドゥー教徒で、自らをチェトリ、ないしラージプートなどと自称する人々である (DAHAL：1994, DAHAL, RAI & MANZARDO：1977, SINGH：1994, SRIVASTAVA：1966、名和：1997など参照)。[8)]

以上から、ボテという名称を用いることの適切さは別として、ヒマラヤ全体についてはいうまでもなく、ネパールに限っても、センサスのように、ボテを1つの民族集団として扱うのが適当でないことは、明らかである。従来、ネパールにおいて一般にボテと呼ばれてきた人々についての民族誌を要約すると、チベット系の言語、文化をもつ集団とそれ以外の集団とがあり、前者にはグルンを自称する人々も含まれるが、シェルパのようにかなり広い範囲に同一の集団が分布する例はむしろ例外であり、ほとんどの集団は、せいぜい1つの谷の流域の数か村程度の住民を単位として、個別の集団としてのアイデンティティーを維持し、かつ地方ごとの文脈においては、周囲からもその個別性を認められてきたのだとみてよい。これらの個々の集団を、言語などの文化的指標に基づいて、独立した民族集団と客観的に認めうるか否かを判断することは、この際問題ではない。

いずれにせよ、こういった民族誌の認識と、1991年のセンサスにおけるカースト・民族集団に関する集計の結果の間には、大きなギャップが存在するが、シェルパに関する限り、そのギャップは、具体的には以下の2点にある。第1に、センサスにおいては、民族誌の認識に比べて、山岳部の民族集団全体の中でのシェルパの比率が圧倒的に高いことであり、第2には、民族誌ではまとまった人数のシェルパが分布していないとされていた地域に、センサスではかなりのシェルパ人口が見られることである。このうち第2点については、カトマンズをはじめとする首都圏に限れば、実際に近年かなりの人数のシェルパが流入していることが知られているが(鹿野：1995, MÜHLICH：1994)、それでもセンサスに見るように10,000人を越えるシェルパが首都圏に住んでいるとは、民族誌からは考えにくい。また民族誌からは、これまでまとまったシェルパの人口が存在しないと考えられてきた地域、特に西部開発区以西の高地に、近年まとまった人数のシェルパが移住したということも、ほとんどありえないであろう。東部開発区の高地に関しても、Solu-Khumbu や、インドの

アッサム、シッキム、西ベンガルのダージリン地区などからの、若干のシェルパの移住者の存在は考えられなくはないが、それにしてもセンサスの示す各郡におけるシェルパの、他の山岳部民族集団人口に対する比率は、従来の民族誌の認識からすれば、あきらかに高すぎるように見える。

要するに1991年のセンサスにおいては、パハリー系のヒンドゥー教徒から一般にボテとよばれてきた高地のチベット系の人々のうち、従来はシェルパとは考えられておらず、それぞれに独自の集団を形成していた人々のかなりの部分が、限られた選択肢の中で、自らをシェルパと申告し、その通りに集計されたものと考えられる。もっとも、同じようにボテと呼ばれてきた人々のなかには、Mustang 郡、Dolpa 郡などでのように、シェルパともボテとも申告せず、むしろ従来の自称通りにグルン、チェトリなどと申告したと思われる集団もあることは、注意しておきたい。つまり1991年のセンサスにおいては、多くの山岳部のチベット系住民のあいだで、「シェルパ化」とも言うべき現象が起きたのである。[9] この「シェルパ化」は、少なくとも幾つかの地域では、個人的にというより、集団のレベルでなされたように見える(例えば Gorkha 郡、Humla 郡など)。こういった「シェルパ化」は、いうまでもなく直接的には、センサスそのもののありかた、より具体的にはそのカースト・民族集団の分類のありかたにかかわっているが、同時に、センサスという限られた場面でたまたま生じたというばかりではない側面ももっている。次節ではこういった「シェルパ化」の要因と背景について検討する。

3）「シェルパ化」の要因と背景

1991年センサスにおけるカースト・民族集団の分類は、山岳部についてはすでに述べたように、シェルパ、ボテ、「その他」の3つのカテゴリーしか用意されていない。このうちボテについては、そう呼ばれる人々自身が、ヒンドゥー教徒側からの、多少とも蔑称的なニュアンスをもつ呼称であることを認識しており、自称として使うことはまずないという事情がある。[10] また各地域で一般に住民が用いる、村レベルでの相互認識のカテゴリーをあらわす名称は、センサスの民族集団のカテゴリーとしては用意されておらず、その名称で申告したとしても「その他」として一括されてしまうことになる。これに対してシェルパは、ネパールのチベット系の民族集団としては最大の人口をもつだけでなく、早くからヒマラヤ登山や観光を通じて外国人のあいだでの知名度も高く、経済的に高い水準にある人々という積極的なイメージを伴う民族名称である。すでにグルンやチェトリなどの、他の大規模なカースト・民族集団の名称を自称していた人々を別として、その地域を離れれば比較的知名度の低い、小規模な、そして従来センサスの民族集団のカテゴリーには含まれていない名称を自称としてきた人々が、センサスという場面で、限られた選択肢の中からシェルパという名称を選択したというのは、ある程度自然なことであったといって良い

であろう。

しかしチベット系の諸民族集団において生じた「シェルパ化」は、実は必ずしもセンサスに限られるわけではなく、むしろこれに先んじて、1970年代後半以降、さまざまな場面、状況のもとで生じていたのであり、センサスの数値は、むしろその結果でしかないという面が強いようにも思われる。すなわちこの「シェルパ化」は、ヒマラヤでの登山やトレッキングをはじめとする観光産業が、ネパールの基幹的な産業として定着し、その対象地がネパールの広い範囲に拡大するとともに、シェルパが登山の高所ポーター、トレッキングのガイドなどから、次第にホテル、旅行代理店、土産物店の経営や、さらにはカーペットやトレッキング用品の製造業など、観光関連産業の経営者化していったプロセスと深くかかわっている。多くの Solu-Khumbu 出身のシェルパは、この過程でカトマンズへ移住し定着した。シェルパがたどったこのプロセスについては、筆者はすでに論じたことがあるので、ここで繰り返すことはしないが(鹿野：1993，1995，1997a、1997b，1998)、要するにこの過程で、パハリー系のヒンドゥー教徒からは、もともとボテの1集団にしかすぎなかったシェルパは、外国人観光客の視点からは、ネパールを代表する民族とさえみなされる存在になったのである。

1970年代後半から、おおくのシェルパが登山、トレッキングなどのポーター、ガイドなど、すなわち被雇用者としての立場から、次第にさまざまな職種の経営者化してゆくとともに、一方では、従来シェルパが事実上独占していた、ポーター、ガイドなどの職種には、シェルパ以外のカースト・民族集団の出身者が進出し始めたが、[11] これらのポーターやガイドに対して、外国人観光客は、実際のカースト・民族集団にかかわらず、それまでと同じようにシェルパと呼び続けてきたし、またポーター、ガイド自身や旅行代理店なども、あえて訂正することはしていない。さらにシェルパは、いまや欧米諸国では、信頼性の高いコンピューターのソフトウエアや悪路に強いバン型自動車の商品名、さらには首脳会議（サミット）を下から支える事務局の代名詞をも意味するようになっているという（ADAMS：1996，44-47)。

カトマンズには、現在シェルパ、ないしこれに関係する地名(例えばソルやクンブ)、人名（例えばチョモランマの初登頂者であるテンジン）などを冠したホテルやレストラン、旅行代理店、商店など、主に観光客を対象とした企業が数多く存在するが、それらの経営者も実は必ずしもシェルパとは限らない。[12] こういったシェルパのイメージは、ネパール国営航空のスチュワーデスの一部が着用している「シェルパ・ドレス」や、ネパールで発行されている観光パンフレットにしばしば見られる「シェルパ風のもてなし」といった表現など、広範囲にわたってみられるように、今日ではネパールの支配的な集団であるヒンドゥー教徒の高カーストにとっても、利用価値があるものとして認められるようになっている。

要するに近年のネパールの国際的な観光地化の流れのなかで、とりわけ観光産業に依存を強めていったシェルパ以外のチベット系民族集団の成員は、それまでそれぞれの地方での相互認識や自称に用いられてきたさまざまの集団名称に変えて、知名度が高く、積極的なイメージを伴うとともに、文化的にも共通性が高いシェルパという民族名称を、状況によっては自称として用いるようになってきたのである。こういった「シェルパ化」は、とりわけカトマンズを始めとする首都圏や、登山隊、トレッカーなどが多く訪れる地域で、かつ外国からの旅行者と直接接するような場面で、まず生じるが、しだいに外部の人々との関係一般に拡大してゆく。センサスもまた、国家という外部の制度との出会いの場であった。ただこのような「シェルパ化」は、同じようにボテと呼ばれてきた人々のなかでも、すでにグルン、チェトリなどのような、知名度も高く、人口も多く、そしてカースト体系の中で相対的に高い地位を伴う名称を自称していた集団においては、あまり生じなかったようである。

もっともネパールのチベット・ビルマ系の民族集団としては最大の人口をもつグループの1つであるタマンの場合は、状況によってはシェルパと自称することがあるという（CAMPBELL：1997，230，FISHER：1990，137。注8も参照）から、もともと自称していた民族名称と、その変更のあり方の要因、背景の関係を、人口規模といった単一の要因から、単純に一般化することは避けるべきであろう。

ところでこういった「シェルパ化」の現象に対して、「本来の」シェルパはどのように対応してきたのだろうか。結論から言えば、彼らの側では、一方でこういった対外的な場面、状況のもとでの「シェルパ化」を許容しつつ、他方ではそのメンバーを「本来の」シェルパに限定した組織（シェルパ・サービス・センター）を作り、積極的な活動を通じて集団としての結束を強化するという、二面的な対応をしてきたように思われる。すなわち「本来の」シェルパは、彼らから見てシェルパではない人々が、外国人観光客やヒンドゥー教徒に対してシェルパと名乗ることについては、「シェルパのほうが有名だから」とか、「どうせ区別がつかない」として、あまり問題にしない。しかしシェルパ・サービス・センターの会員からは、センサスではシェルパとして集計されている極東部や西部以西の地方の出身者はもとより、従来からシェルパを自称してきたHelambuやLantangといったカトマンズ北方高地の住民も、基本的には排除されている。[13] またセンターの活動とは別に、最近ではカトマンズで育ち、シェルパ語やシェルパの伝統的な歌、踊りなどを知らない若い層を対象として、それらの伝承を目的とする「シェルパ文化協会」も組織されている。[14]

こういったシェルパの二面的な対応のありかたは、必ずしも近年になってはじまったものではない。もともとシェルパという民族集団は、FÜRER-HAIMENDORFが「開かれた社会」と呼び、OPPITZも指摘したように、ネパールに定住した後の数百年の間に、その周辺部に、チベットからの移住者やチベット系以外の人々までを組み込みながら、拡大

してきたという歴史をもつ(FÜRER-HAIMENDORF：1964，chap.3，OPPITZ：1968，143-146)[15]。シェルパにおいては、他のチベット系の人々との通婚も珍しくなかったが、今日のカトマンズにおいては、その機会はさらに増加した。FÜRER-HAIMENDORF や OPPITZ は、こういったシェルパの民族集団のあり方を、共時的には中核の「真のシェルパ」から周辺のカムバまでを含む、同心円的な構造としてとらえてきたが(ibid.)、それはやや硬直した捉え方であり、むしろシェルパというカテゴリーは、さまざまな人々により、そのときどきの場面、状況に応じて、可変的に使い分けられてきたというのが、実態であろう[16]。

こういったシェルパの柔軟なアイデンティティーのありかたは、おそらくは欧米からの登山隊などと接触する以前から、ヒマラヤ越えの交易などで、さまざまに異なる文化をもつ人々との交流を通じて培われてきたのであろうし、言い換えれば、むしろそれらの経験の蓄積こそが、欧米の登山家などのシェルパに対する高い評価の前提にあったのだが、そういった経験は、実はシェルパ以外のチベット系の多くの集団にも共有されていたはずである。

いずれにせよ、ネパールにおけるチベット系集団の広範な「シェルパ化」は、20世紀後半における観光化を始めとする外部の世界との接触、交流の機会の増大を契機として進んだものと考えられる。1991年のセンサスにおけるシェルパ人口とその分布のあり方は、たしかに一方で、直接的には、国家やその支配的な集団であるヒンドゥー教徒の、意識的、無意識的な分類に基づく、センサスのカースト・民族集団分類のあり方に起因していようが、ある意味ではその分類についての意識自体が、欧米などを主とした外部世界の認識を部分的にせよ反映していたと言えようし、他方ではこれに対して、チベット系のそれぞれの集団が、一定の選択肢のなかでではあれ、主体的な対応として民族名称の選択をした結果であった。

ところで、これと基本的には共通するプロセスが、20世紀前半のインド、西ベンガル州ダージリンにおいて起きていたと考えられる。

3　ダージリンにおける「シェルパ化」

ダージリンは19世紀前半の英領時代に、ヒマラヤ山麓の保養地として、ついで茶その他のプランテーション地域として発展したが、それ以前には人口希薄な地域であったため、その開発にはネパール東部やシッキム、ブータンなどから、多くの出稼ぎ労働者が流入し、次第に定着していった。これらの移住者の中には、かなりの数のチベット系の人々が含まれていた。これらのチベット系の人々は、インドのセンサスにおいては、全体としてボーティアと一括されたが、そのボーティアは初期には出身地によって、ネパール、シッキム、ブータンのボーティアの3つに分類された。ただしこれらのボーティアは、チベットそのも

表―5　ダージリン地区におけるボーティア人口
（1901、1931は母語人口、1951以降は「指定部族」人口）

Census Year	Population				
	Sherpa Bhotia	Sikkimese B.	Drukpa B.	Bhotia Total	Tibetan
1901	3,477	1,545	2,504	7,526	1,686
1931	5,627	134	1,499	7,260	2,774
1951	8,998	9,061		18,059	1,717
1961	N. A.	N. A.		22,086	7,679
1971	N. A.	N. A.		30,442	N. A.
1981	N. A.	N. A.		40,192	N. A.

資料出所　GOVERNMENT OF INDIA : 1980, SINGH : 1994

のからの移住者（チベット人）とも区別されている。そしてこのうちネパールのボーティアは、別名シェルパ・ボーティアと呼ばれていた。ここで20世紀初頭以降のダージリン地区のセンサスにおけるボーティア人口をまとめると、表―5のようになる。このうち1901、1931年の数値は、民族集団人口そのものではなく、それぞれの言語を母語とする者の数値であるが、ここからはシッキム、ブータンのチベット系言語を母語とする者の人口が、20世紀初頭の30年間に著しく減少しているのに対し、「シェルパ語」を母語とする者の人口は順調に増えていることがわかる。1951年以降の数値と考えあわせると、前者においては、その民族集団成員の人口そのものが減少したというより、世代交代とともに母語の変化が生じたのに対し、後者では、少なくともその時点までは比較的母語の変化が起きなかったと考えられる。1961年以降のセンサスにおいては、ボーティアの内部の分類は示されていないが、[17] 1981年のセンサスによれば、ダージリン地区で「シェルパ語」を母語とする者の人口は14,195人（SINGH：1994，1071）である。

ここでネパールのボーティア、すなわちシェルパ・ボーティアというカテゴリーについてみると、すでに述べたように、ネパール東部には元来はシェルパ以外にもさまざまの民族名称をもつチベット系の集団がいたのであり、ダージリンへ移住してきた人々の中には、それらシェルパ以外のチベット系集団成員もある程度含まれていたはずである。19世紀後半から20世紀前半にかけて、一般に人口過剰状態にあったネパール東部の山岳、丘陵地域からは、多くの人々が職を求めてダージリンへ出稼ぎにきていたのである（CAPLAN：1970，鹿野：1980，1985，RAMBLE：1997）。

だがこういったチベット系の人々は、ダージリンにおいても、人口のみならず言語、宗教などあらゆる面で少数者であり、かつ経済的にも、少なくとも当初は、イギリス人を頂点とする植民地インドの下層労働者として組み込まれる存在でしかなかった。こういった

状況の下で、ネパール出身のさまざまなチベット系民族集団に属する人々が、センサスにおいてその個別性を無視され、ネパールのボーティア、ないしそのうちでは最大の人口をもつシェルパの名の下に、ひとくくりにされたのも、ある意味で当然のことであったと考えられる。そして1910年代までは、ヒマラヤ登山はまだ本格的には始まっておらず、したがってシェルパもまだそれとの関係でクローズアップされる存在ではなかった。

だが1920年代に入ると、ヒマラヤ登山の高所ポーターとしてのシェルパの高い評価は定着し、シェルパという民族名称は、ヒマラヤ登山の高所ポーターと同義語化してゆくとともに、今日にまでつながる勇敢、忠実、快活といったさまざまの積極的なイメージを伴って語られるようになる。[18] もっともこれらの高所ポーターの中に、厳密にはシェルパではないさまざまな民族集団の出身者が含まれていたことも、当事者の間では周知の事実であった(鹿野：1993)。そしてこれとともに、ダージリンに住むネパール出身のチベット系の人々は、そのほとんどがシェルパを自称するようになり、またチベット系以外の人々も同様に、彼らをもシェルパとみなすようになっていった。[19] ダージリンはインドのパキスタンとの分離独立以降、ヒマラヤ登山全般の基地、高所ポーターすなわち「シェルパ」の唯一の供給地という位置づけを失い、ネパール東部高地からのチベット系の人々の、職を求めての流入も、1950年代半ばにはほとんど見られなくなり、むしろ1970年代になるとダージリンとその周辺に住んでいたシェルパなどのなかには、登山、観光関連の職を求めてネパールへ戻ってくる者もでてくるが、シェルパのイメージ自体は、とりわけ1953年に、ダージリン在住のシェルパ、テンジン・ノルゲイが世界最高峰エヴェレスト（チョモランマ）に初登頂したことによって、決定的になった。[20]

要するにダージリンにおいても20世紀前半には、ネパールから移住してきたさまざまな集団に属するチベット系の人々のシェルパ化が生じたが、それはセンサスに見られるような、国家やそこでの多数者であるヒンドゥー教徒による、細かな差異を無視した恣意的なカテゴリーへのくくりの結果であるとともに、ダージリンの観光地化と、シェルパのヒマラヤ登山での活躍を通じての積極的なイメージの形成、定着を背景としての、本来は独自の名称を名乗っていたチベット系の人々自身によるシェルパという自称の選択、そしてもとからのシェルパによるその許容などが、相互に作用しあった結果であった。そしてこの過程は、ネパールにおける「シェルパ化」と、基本的に共通する性格をもつというより、むしろ先行して生じたということができよう。

4　おわりに

本稿で扱った「シェルパ化」の過程は、一般化すれば、国家や支配的な多数者が、自らが多少とも恣意的に設定した特定のカテゴリーに、複数の従属的な小集団をくくってしまう過程であると同時に、それらの小集団の側が、状況によっては積極的にそのカテゴリー

を選択し、自称するに至る過程でもあった。ところで周知のように南アジアの、ヒンドゥー的カースト・システムを前提とする社会においては、特定のカーストが、その名称や属性の変更、上昇を主張し、試みる、いわゆるサンスクリット化、あるいはラージプート化について、多くの議論がなされてきた。ネパールに限れば、特にネワールにおけるシュレスタ化に関する議論がある（QUIGLEY：1986，1995）。いうまでもなく「シェルパ化」は、その本質において、そういったヒンドゥー教徒社会における、カースト・システム内での地位、属性の上昇を目指す過程とは異なっており、従って本稿でもその比較を試みるつもりはない。シェルパというカテゴリーが、他のチベット系の集団より好ましいイメージをともなうようになったのは、なによりもダージリンなりネパールなりが国際的な観光地としての性格をもつようになってからのことであり、もともとの地域住民がもつ文化的文脈の中で生じた過程ではない。

ただこういったことの結果としてであれ、この「シェルパ化」が、植民地時代の、そして今日のインドや、ヒンドゥー国家としてのネパール、そしてその支配的多数者であるヒンドゥー教徒の、特に高位カースト成員による、カースト的枠組み、秩序のイデオロギーと全く無関係であるとまでは言えないであろう。ここで見てきたセンサスにしても、そのカースト・民族集団の分類は、基本的にはヒンドゥー教徒社会の価値観に基づいてなされているという側面がある。

シェルパとは誰のことか、を考えるにあたっては、いずれにせよ、常にさまざまな状況、場面のもとでの可変性と、その通時的変化とを、当事者の主体的な意志や選択をも考慮にいれたうえで、想定する必要があるのであり、単純に「本来の」シェルパ、「真の」シェルパと、「偽の」シェルパとを区別すればよいといった問題ではない。また次世代におけるシェルパのカテゴリーがどのようなものになるかも、当面筆者の予測の能力を超えるが、いずれにせよ、それはシェルパ自身が外界との関係で、一定の限界の中でにせよ、自らの歴史を構築して行く過程の一部である（ORTNER：1998，262）。

そしておそらく集団の名称の可変性、状況決定性は、シェルパの場合に限らず、程度の差こそあれ、一般的、普遍的に存在するであろうし、従来おもにいわゆるサンスクリット化、ラージプート化の文脈で論じられてきた、南アジアのヒンドゥー教徒社会のなかでのカースト・民族集団の、名称や属性の変化の過程も、状況によってはそれらにとどまらず、より多様な要因を考慮したうえで検討されるべきだと考える[21]。ただそういった問題を具体的、実証的にとりあげた研究は、現状ではなお端緒についたばかりであり、今後の事例の蓄積が当面の課題であるといえよう。

注

1）ジャートは本来ヒンドゥー教徒社会におけるカーストを指すが、ネパール語におけるジャートは、民

族集団（ethnic group）、宗派集団（例えばイスラーム教徒）、国籍（例えば日本人）などを指す語としても用いられる。本稿でも以下ではカースト・民族集団と表記する。

2）センサスの結果については、同時にいうまでもなく技術的な信頼性についての検討が欠かせないが、この点についても本稿では触れない。本稿で扱うセンサスの数値は、サンプリングを伴わないカースト・民族集団および母語別の人口であり、そのおおよその傾向を見るには、あまり問題はないと考える。

3）ボテ（ないしボーテイア、ブーテイア Bhutia）という名称は、後述するように、個別の民族集団ないし言語を示す語としては不適切であるが、以下ではセンサスの結果を記述するために、とりあえずそのまま用いることにする。

4）ネパールにおいては、一般に1980年代までネパール語化が進行したが、1990－91年の民主化以降、さまざまな民族語への回帰傾向が顕著に見られるようになり、センサスにもその動向が反映されたという見方がされる。ただ実際には多くの人々はバイリンガル（ないしはさらに多くの言語を話す）であるなど、単純に結論を出すことは困難であろう。本稿では、この問題については、これ以上触れない。

5）1991年センサスのサンプル調査によれば、ネパール全体のシェルパの母語はシェルパ語70 6%、ネパール語18.9%、その他10.5%なのに対し、都市部のシェルパの母語は、シェルパ語49.6%、ネパール語30.0%、その他20.4%であった（HIS MAJESTIES GOVERNMENT OF NEPAL：1992）。

6）例えば Mustang 郡では、民族としてのグルン人口7,720人に対し、グルン語を母語とする者の人口は1,489人にすぎない。また Dolpa 郡ではグルン人口4,849人、マガール人口3,044人に対し、グルン語、マガール語母語者の人口はそれぞれ165人と5人、Mugu 郡ではタマン人口1,464人、グルン人口639人に対し、タマン語、グルン語母語者の人口はそれぞれ5人と4人である。

7）カトマンズでは1979年に、各地方から移住してきたシェルパによって、互助組織（シェルパ・サービス・センター　Sherpa Sewa Khendra）が結成されたが、その会員の数は1993年には460世帯で、その出身地を見ると、圧倒的多数（約80%）は Solu-Khumbu 郡であった。これに Ramechhap, Dolakha 各郡の出身者を加えると94%に達する（鹿野：1995, 73）。また MÜHLICH もカトマンズのシェルパの1992年における世帯数を約450としている（MÜHLICH：1994, 209）。

8）DAHAL によれば、ヒンドゥー教徒がボテと呼ぶ Mahakali 県 Dalchula 郡のビャンシ（Byansi）の人口は301世帯、1,867人（1992年）である（DAHAL：1994, 35）。センサスでは、この人々は丘陵部のチェトリとして集計されたと推測される。

9）「シェルパ化」（Serpaization）という語は、すでに FISHER が使用しているが、その場合はタマンが欧米からの観光客に対してシェルパと自称するケースを指している（FISHER：1990, 137）。

10）にもかかわらず、かなりのボテの人口が集計されている地域があることについては、センサスのありかたにおける別の問題が生じて来ようが、本稿ではこれについて具体的に論じる用意がない。

11）筆者が参加した2つの登山隊の例を挙げると、1973年のエベレスト登山隊では高所ポーター81人のうち、Solu-Khumbu 出身のシェルパ以外の者は3人（3.7%、いずれもタマン）にすぎなかったが、1984年のカンチェンジュンガ登山隊では35人のうち、7人（20%、タマン5人、グルン、マガール各1人）を占めた。なお、この2つの隊はいずれも日本隊で同じ人物（Khumbu 出身のシェルパ）がサーダー（高所ポーター頭）をつとめ、高所ポーターの人選を一任されていた。

12）例えばカトマンズの代表的な高級ホテルの1つである「シェルパ・ホテル」の経営者は、極西部 Bhajang 郡の旧藩王であるという（南：1998, 17）。シェルパの名を冠したロッジやレストラン、商店などは、カトマンズには他にも多くあるが、その経営者には筆者が知る限りでも、タマンやインドのラダク地方出身者などがいる。

13）ただしこれらの人々が、センター所有の会館を一定の条件のもとで使用することは認められている（鹿野：1995）。

14) ADAMS は、シェルパが、欧米人などから「真のチベット文化の担い手」とみなされていることを意識し、その期待に応えるために、チベット的伝統文化を維持しようと努力することを強調する（ADAMS：1966）が、それは一方で、ネパールという国家の中で学校教育などを通じて近代化を図ることと矛盾しない(DRAPER：1988)。こういった多様な戦略の併存は、他のチベット系の集団においても見られるという（LIECHTY：1998，150，RAMBLE：1997，404-409)。

15) このようなプロセスは、シェルパばかりでなく、ネパール極西部 Humula 郡のチベット系集団フムリ・キャンパ（Humli Khyampa）においても、19世紀以降の比較的短期間に、さまざまな出自をもつ小集団が統合して形成されたことが、指摘されている（RAUBER：1980)。

16) 名和による「民族論的状況」論（名和：1992）参照。CAMPBELL もタマンが状況によって自称としての民族名称を使い分けることを指摘している（CAMPBELL：1997，221-230)。

17) ボーティアはインドの憲法に規定された「指定部族」(scheduled tribe) である。なお、1961年におけるチベット人の人口が1951年に比べて著しく多いのは、1959年のチベットにおける内乱にともなう難民の流入の影響によると思われる。

18) ただ登山隊の高所ポーターとして雇用される人々が、常に雇用者によって高い評価を与えられるとは限らない。シェルパと対照的に「悪名高い」ポーターの例として、カラコルム地方のバルティ（Balti）があげられる(MACDONALD：1998)。シェルパとバルティに対する評価の相違の重要な要因のひとつは、1920—30年代という植民地時代のヒマラヤにおけるそれぞれの位置と役割の違い（すなわち実際に登山活動が行われる地域では外来者であり、かつ中間管理者であった前者と、登山活動が行われる地域の住民であり、かつ末端の被雇用者であった後者）にあると思われるが（鹿野：1975)、ここではこれ以上触れない。

19) こういった、もともとは細分化されていた複数の民族集団を、国家や支配的な多数者が、より単純なカテゴリーにまとめてしまい、その対象となった人々もむしろそれをある程度積極的に受け入れるという過程は、ダージリンでは、チベット系民族集団においてばかりでなく、ネパールからの移住者のうち、チベット系の人々を除くほとんどすべてを「ネパール人」(Nepali) としてまとめてしまい、また移住者の側も自らをそう自称するようになるという形で見られる。これらの「ネパール人」は近年では強い共通のアイデンティティーをもっており、ネパール語の公用語化運動を強力に推進してきた（HUTT：1997)。

20) そのテンジン・ノルゲイも、出生地はチベットで、ダージリンでははじめはボーティアと呼ばれていたという（根深：1998，54—62)。

21) ネパールに限れば、近年のさまざまのカースト・民族集団の名称やアイデンティティーの流動とその背景について、GELLNER 他 ed.：1997,SKKINNER 他 ed.：1998など所収の諸論文が論じている。またインドの「部族民」における同様の問題については、BAVISKAR：1995が示唆に富む。

参考文献

ADAMS, V.

1996：“Tigers of the Snow and Other Virtual Sherpa”, Princeton University Press

BAVISKAR, A.

1995：“In the Belly of the River-Tribal Conflicts over Development in the Narmada Valley”, Oxford University Press

BISTA, D.B.

1972：“People of Nepal”, 2nd ed., Ratna Pustak Bhandar

CAMPBELL, B.

1997：‘The Heavy Loads of Tamang Identity’, in GELLNER, D.N., J.PFAFF-CZARNECKA & J.

WHELPTON ed. " Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom", Harwood Academic Publishers, 205-231

CAPLAN, L.

1970 : "Land and Social Change in East Nepal", University of California Press

DAHAL, D R.

1994 : 'Poverty and Plenty · A Case Study of the Byansi People of Darchula District of Far Western Nepal', in ALLEN, M ed "Anthropology of Nepal", Mandala Book Point, 36-48

DAHAL, D R , N.K. RAI & A.E MANZARDO

1977 : "Land and Migration in Far-Western Nepal", Tribhuvan University

DRAPER, J.

1988 : 'The Sherpas Transformed-Toward a Power Centered View of Change in the Khumbu', "Contributions to Nepalese Studies", 15-2, 139-162

FISHER, J F

1990 : "Sherpas : Reflection on Change in Himalayan Nepal", University of California Press

FÜRER-HAIMENDORF, C von

1964 : "The Sherpas of Nepal", John Murray

1975 : "Himalayan Traders", John Murray

GELLNER, D N , J. PFAFF-CZARNECKA & J WHELPTON ed.

1997 : "Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom", Harwood Academic Publishers

GOVERNMENT OF INDIA

1980 : "Gazetter of India, West Bengal, Darjeeling"

HIS MAJESTIES GOVERNMENT OF NEPAL

1984 : "Population Census 1981, Social Characteristic Tables, Vol. 1, Part 3"

1992 : "Population Census 1991, Advance Table, Vol, 1, 2"

1993 : "Population Census 1991, Social Characteristic Tables, Vol 1, Part 6 & Part 7"

HUTT, M

1997 : 'Being Nepali without Nepal-Reflection on a South Asian Diaspora', in GELLNER, PFAFF -CZARNECKA & WHELPTON ed. "Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom", 101-144

JEST, C.

1978 : 'Tibetan Communities of the High Valleys of Nepal : Life in an Exceptional Environment and Economy', in FISHER, J F ed "Himalayan Anthropology", Mouton, 359-364

KUMAR, B K C.

1995 : 'Social Composition of Population', in HIS MAJESTIES GOVERNMENT OF NEPAL ed "Population Monograph of Nepal", 301-337

LIECHTY, M.

1998 : 'Consumer Culture and Identities in Kathmandu : Playing with Your Brain', in SKKINNER, D , A PACH & D HOLLAND ed "Selves in Time and Place-Identities, Experience, and History in Nepal", Rowman & Littlefield Publisher, 131-154

MACDONALD, K.I

1998 : 'Push and Shove : Spatial History and the Construction of a Portering Economy in Northern Pakistan', "Comparative Studies in Society and History", 40-2, 287-317

MÜHLICH, M.

1994：'The Household, the Householder and Neighbourhood in Sherpa Communities of Baudha and Solu', in ALLEN, ed "Anthropology of Nepal", 209-217

OPPITZ, M.

1968："Geschichte und Sozialordnung der Sherpa", Universitatverlag Wagner

ORTNER, S.

1989：" High Religion-A Cultural and Political History of Sherpa Buddhism", Princeton University Press

1998：'The Case of the Disappearing Shamans, or No Individualism, No Relationalism', in SKKINNER, PACH & HOLLAND ed. "Selves in Time and Place-Identities, Experience and History in Nepal", 239-267

QUIGLEY, D.

1986：' Introversion and Isogamy：Marriage Patterns of the Newars of Nepal', "Contributions to Indian Sociology", 20-1, 75-95

1995：' Sresthas：Heterogenity among Hindu Patron Lineage', in GELLNER, D.N. & D. QUIGLEY ed. "Contested Hierarchies", Clarendon Press, 80-108

RAMBLE, C.

1997：' Tibetan Pride of Place：Or Why Nepal's Bhotiyas are not an Ethnic Group', in GELLNER, PFAFF-CZARNECKA & WHELPTON ed. "Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom", 379-413

RAUBER, H.

1980：' The Humli-Khyampas of Far Western Nepal：A Study in Ethnogenesis', " Contributions to Nepalese Studies", 8-1, 57-80

SINGH, K.S.

1994：" People of India, Vol. 3, The Scheduled Tribes", Oxford University Press

SKKINNER, D., A. PACH & D. HOLLAND ed

1998："Selves in Time and Place-Identities, Experience and History in Nepal", Rowman & Littlefield Publishers

SRIVASTAVA, R.P.

1966：' Tribe-Caste Mobility in India and the Case of Kumaon Bhotias', in FÜRER-HAIMENDORF ed. "Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon", Asian Publishing House, 161-212

STEVENS, S.F.

1993："Claiming the High Ground：Sherpas, Subsistence and Environmental Change in the Highest Himalayas", University of California Press

石井　溥編

1986：『もっと知りたいネパール』、弘文堂

鹿野勝彦

1975：「ヒマラヤ登山における「シェルパ」の位置づけ」、『岩と雪』41、山と渓谷社、20-29

1980：「村落の経済変化と国境―インド、ネパール国境のケーススタディ」、『民族学研究』45-1，59-69

1985：「ダージリン・ノート」、『東海山岳』5、日本山岳会東海支部、173-184

1986：「チベット系諸民族」、石井　溥編『もっと知りたいネパール』、148-158

1993：「シェルパと観光―20世紀初頭から1980年代まで」、『金沢大学文学部論集行動科学科篇』13，95-116

1995：「カトマンズのシェルパ社会―シェルパ・サーヴィス・センターの組織と活動を中心に」、『金沢

大学文学部論集行動科学科篇』15，65-86
1997a：「シェルパの20世紀―ヒマラヤ登山、観光とシェルパ」、『山岳』92、日本山岳会、28-37
1997b：「忠実な東洋人のイメージ―グルカとシェルパ」、石井　溥編『アジア読本ネパール』、河出書房新社、78-84
1998：「20世紀後半におけるロールワリン・シェルパの経済社会変化」、『リトルワールド研究報告』14，1-45
南真木人
1998：「西ネパールにククリをもとめて」、『月刊みんぱく』6，15-17
名和克郎
1992：「民族論の発展のために―民族の記述と分析に関する理論的考察」、『民族学研究』57-3，297-317
1997：「ネパール・ビャンスにおける民族諸範疇とその用法」、『民族学研究』61-4，543-564
根深　誠
1998：『シェルパ・ヒマラヤの栄光と死』、山と渓谷社